きのうの虹

佐多稲子

きのうの虹

佐多稲子

毎日新聞社

きのうの虹

昭和五十三年七月十日　印刷
昭和五十三年七月二十日　発行

著　者　佐多稲子（さたいねこ）

編集人　吉田掟二

発行人　高原富保

発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　図書印刷
製本　大口製本

© INEKO SATA Printed in Japan 1978

きのうの虹

目　次

時のめぐり

七たび目の辰年　13
新しい春にむけて　16
粉雪の舞う宿　17
野の花のたより　21
しのぶもじずりの便り　28
陽光と無慙と　31
重い八月　35
町育ちの山住い　39
秋　41
秋の陽ざし　49
私と十月　51
秋雨の日に　54
自分に云うこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

創るということ

今年の野上弥生子さん　59
奥野健男さんのこと　61
胸にしみてくる悲しみ　64
人間を愛している人の言葉　66
長谷川四郎さんのこと　69

*

私の中の日本人　73
私にとってのメリメ　79
チェホフの言葉　82
チェホフ全集　84
本との出合い　86
秋声の描く女たち　90

*

「女同士の承認」　92
友達から聞いた話　96
その歴史の中に　100

作品の事実調べ　105
作家というもの　108
微妙なある読後感　111
村山知義氏の「自叙伝」について　115

おもかげ

縁のあとを追う　121
菜穂子　155
堀辰雄を偲ぶ　158
花田清輝さんを憶う　162
花田さんのこと　166
ある晩の雑談で　169
舟橋さんとのあれこれ　172
舟橋さんと「風景」と　175
『ひかりごけ』の事など　178
『歴史の谷間』から　182
小熊秀雄のおもい出　185
同郷のひと　188

立野信之と徳永直の文学碑　196
港野喜代子さんの顔　200
私の好きな詩　203

観ること

見ること好きへの自己判断　213
秋元さんの視線　215
かさぶた式部考　217
愛と悲しみと怒りと　219
魅せられる　223
おもい出など　226
「あゝ野麦峠」をみる　230
舞楽拝見と三船祭　233
寺社に捧げた舞い　236
お水取りの記　240

街のながめ

私の幼年期　249

故郷の言葉 251
長崎と文学 254
なつかしいヒライタン 255
古い言葉 256
*
人がいっぱい 258
旅でのちょっとした会話 260
七月九日の日記 261
狭山裁判の上告棄却 263
広告と標語 265
*
ひとつの歳月 268
浅草で見た若い人 271
背負う 273
ある女の人 274
友情は澄んだ水 277
固定観念とは 280
*

矛盾の中で　282
ひとつの意見　284
親の生き方をそのまま見せて　285
*
同情ということ　287
ある朝のラジオ　288
私の主治医　290
おかしな症状　292

装幀　熊谷博人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

きのうの虹

時のめぐり

七たび目の辰年

新年をむかえるたびに十二支が持ち出され、それに当てはめて当年の性格づけなどをするのは、春気分をそそる生活の彩りでもあろうか。年賀状にはその年の十二支を描いたものが必ずあるし、年おとこ、年おんなも引出される。西暦であらわすことが多くなった今日でも、十二支が生きているのは、生活感情にまだそれが残っているということか。若い人はどうなのだろう。私なども新年に限らず十二支を呼びおこすものが自分の中にあって、干十まではわからないまま、生れてくるものにも十二支を当てはめたりする。がそれはもう一種の心のあそびでもあるから、新年に十二支が浮び上るのも、正月のしきたりの古典にかえる雰囲気のひとつなのかもしれない。十二支の本元であった中国の現在はどうなのであろう。今日の中国の話はよく聞くのに、これについては私ははっきりしない。

十二支について書き出したのは、今年が私の生れ年だからである。私に七たびめぐりきたった辰年と云えば、私の年齢は明瞭になる。この年は私の仕事の上の友人に割合に多いのだが、そのうちでも親しかった堀辰雄は、昨年二十三回忌であったし、武田麟太郎も戦後まもなく、おもいがけぬ早さで

亡くなっている。若いときなぜか、堀辰雄と武田麟太郎と、そして永井龍男氏をおないどし、とおもってきたのは、つまり同年の辰年という感じに親しさみたいなものがあったせいのようだ。だから今も辰年というと辰雄と麟太郎の早逝がおもい出される。永井龍男氏は勿論健在である。

七たびむかえた生れ年、と数えてため息さえ出るようだが、その自分の年齢に対して妙に客観的で、ため息というのも他人ごとに対してのようだ。これは人間の感じ方の図太さみたいなものだろうか。私がいま、どこが悪いというのでもない身体の条件も、この図太さを生じさせているものかとおもうが、年齢だけではなく、このごろでは始終、自分の最後も念頭にありながら、これも実感的ではない。自分の死について哲学的になど深めることは私などには遠いが、そのときのもようぐらいはいろいろと想像をする。しかしそれは何の深刻さもともないはしない。その奇妙さに、むしろおどろいている。がこれは私に限ったことでもないらしい。昨年夏亡くなった壺井繁治の百ヶ日の集りが年末にあって、友人たち寄合ったが、ほぼ同年のその人たちが、繁治の写真をほめながら自分の葬式用の写真の用意も、などと言ったりした。がそんな話をするおたがいは、冗談めかすのもわざとではない調子で笑い合った。

そんなだから、自分の年齢について理性では考えながら、感情の上の自覚は至って鈍い。立派な老境をなどとおもい得ないし、その力もないことの証明かともおもうが、一向に変らぬ自分に気づくとき、いい気なものだ、ともおもい、しかしこの齢になって初めてそれがわかるのをおもしろいという気もする。

しかし、この齢になって初めてわかることのうちには、辛いことも当然混り合っている。若いとき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.